Salamander in the circle

第五章

メッサナ

峯村　明

Salamander in the circle

登場人物

ダーヴェ・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・　　〃　　団員
イリチヤ・・・・・・ヒューダーが名付けた少年
レル・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ・・・・・・・　　〃　　・王女
マミヤ・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の娘
コタエ・・・・・・・島の王に仕える女官
バイスロイ・・・・・黄金門の皇帝の息子
パンテオラ・・・・・メッサナ市の総督
コモラ・・・・・・・総督の顧問
バラム＆バランケ・・双子のジャガー。パンテオラの部下
メルノ・・・・・・・メッサナの音楽学校の生徒

目次

メッサナ
75.
76.
77.
78.
79.
80.
81.
82.
83.
84.
85.
86.
87.
88.
89.
90.
91.
92.
93.
94.
95.
第五章のあとがき
奥付

メッサナ

75.

　行方が知れなかった近衛隊長が戻って来た！
　その知らせはエウメロスの地下シェルターの沈鬱な空気を一変させた。カール王子は人目もはばからず顔をくしゃくしゃにし、涙をぼろぼろこぼし、近衛隊長に駆け寄って抱きついた。ふだんのレルならば、（王子殿下、人前でそのように感情を露わにすることはお慎みを）とかなんとか、小声でこっそり忠告していたところだ。しかし今のレルは十三歳の少年の感情の爆発を両手で受け止めてやる。「カールさま！！」と名を呼んで。それはコタエの影響かもしれなかった。彼女は会話の初めに必ず相手の名を呼んでいたから。

「カールさま直々に、我々にお話があったのです！　隊長は無事でおられると！　本当に、よくぞご無事で！！」
　レルはやつれた副長の肩を叩いて労いながら、部下たちを見回した。部下の人数が、ずいぶん減っている。
「皆。心配かけた。私の不在の間も皆が職務の垣根を超え、人々を助けることに心を砕いてくれたこと、カールさまから聞いているぞ」彼は部下のひとりひとりに手を差し伸べ、手を握り合った。皆が皆、気心の知れた間柄ではない。入隊して日の浅い者もいたし、日ごろ考え方の合わない者もいた。けれども今となっては――
「皆、ありがとう。生きていてくれて！」

　コタエは挨拶もそこそこに姿を消していた。いったい何百人いるかわからないけが人

病人を目の当たりにして、じっとしていられなかったのである。

＊＊＊

　皇帝側のスタッフとエウメロスの国防軍との間で編成された巨人族対策本部は地上へ偵察部隊を送り出していた。

　偵察隊のひとつはやがて恐ろしい事実を持ち帰った。エウメロスの穀倉地帯に置かれた穀物庫が荒らされているという。備蓄されていた穀物は残らず引きずり出され、踏み砕かれた。巨人族によって。
「奴らは穀物など食しません。ただ破壊のため、そして食物を取り上げることによって人間を絶望に追い込む。それが目的なのです――」

　また、エウメロス本土沖の島々に避難した人々は食料の持ち出しが十分でなく、避難を支援した国々の援助に頼っていた。しかし長期に渡ればそれも難しくなる。頼みの綱は、本土の穀物庫だったのだ。

　対策本部を支える学者のグループには別の懸念もあった。「巨人族はあの巨体をどうやって維持しているのか」
　それは間もなく判明することになる。管理する者がいなくなったあとの飼育動物を食い尽くした巨人族は、目の前に食料が『いる』ことに気づいたのだ。

76.

　その晩。エウメロス側と皇帝側の代表者の間で会合が持たれた。話し合いをリードするのは皇帝の代理人、名はバイスロイ。黒髪の精力的な風貌の青年で、緑の目には神秘の力とも野心ともとれるものが潜んでいる。

　きわめて由々しき事態である、とバイスロイは言った。「食料はいずれ枯渇しよう。もはや一刻の猶予もならぬ。早急に手を打つ必要がある」

　テーブルについたエウメロスの者たちは一様にうなずく。（そんなことはわかっている）（お宅らがろくな物資も持たずに転がり込んできたからな）（で？　どんな手を打とうと？）

　バイスロイはぐるりとエウメロスの面々を見回してから言った。「交渉だ」
「交渉？」
「交渉？？」
「交渉？？？」
「交渉――と」

　次々と声があがり、しまいにはエウメロス側の声が揃った。『誰と？』

「決まっている」とバイスロイ。「ケストル王国と」
　彼は強い視線をエウメロス側のメンバーに向けた。「ケストルが巨人族による被害を受けていないのは一目瞭然、よろしいかエウメロスの諸君、エウメロスはケストルの侵攻を受けたのだ。しかし既に反撃の時は失われた。食料が尽きれば生き延びる道すら無くなる。巨人族が互いを食い合っている今のうちにケストルと交渉し、巨人族を引き揚げさせるのだ。戦力として使っているからにはできるはず。さもなければ、我々が巨人族の餌食になる」

「その通りか、と……」重い口調はエウメロス国防軍のヴァリス将軍。レルは腕組みをして目をテーブルに据えたまま、気持ちだけを自分の父親である将軍に向けた。
「バイスロイどのの言われること、いちいちもっともである。まさに一刻の猶予もならぬ。それが私の考えだ。皆はどうか」
　軍の人間にとって、反撃の選択肢はないというバイスロイの言葉は重かった。重かったが事実だった。部下たちの重苦しい首肯の最後に、将軍は声をかける。「近衛隊長どの？」

「……王家を守る立場の者として……ケストルには未だヘルガ王女殿下がおられる。もはや、人質といっていいかもしれない。ケストルとの交渉に異論はありません。が、王家の人間を人質としていることにどんな意味があるのか。バイスロイどの、そこはどうお考えか」

「知っての通り人造都市である黄金門市は万が一の場合に備えて地下にシェルターを持っている。此度、甚大な被害を受けて多くの貴族と市民は地下に、皇帝は市外に避難した。巨人族のやりようを見れば、貴君らが直面している危機は黄金門市も同じ。貴君の懸念は私の懸念も同じだ。人質などという卑劣な手を使う輩とは断固戦わねばならぬ。しかもそは王家の人間であるとか。考えられることはひとつ。統治権の要求であろう。我々は皇帝の一族にそういった問題が起こるのを恐れて間髪入れず市の外へ避難した。諸君らの手も頭も煩わせていることは重々、承知している」

　バイスロイは頭を振ってから言った。「我々は運命共同体のようなもの。かまわなければ、エウメロス-黄金門市連合の代表として私が交渉に立とう」

77.

　会議場を出たところで、レルは背後から腕をつかまれた。
「ヴァリス将軍！？」

「いや、行方不明だと聞いていたもんだからな。よく無事で戻ってきた！　さすが我が息子！」

　職務上の報告と挨拶は済んでいるが、ヴァリス将軍は息子の無事な姿がよほどうれしかったのだろう。未だ安否のわからない同僚や部下は山ほどいるのだ。

「父上こそ、よくぞご無事で」レルはちょっと笑って言った。

「いやいや、おまえの兄二人も避難先で頑張っとる。ヴァリス家は運のいい家系なんだろう。しかしおまえもえらいことだな。国王陛下は亡くなられる、王女殿下はケストルで足止めとは」

「ええ。まったく。けれども、心強い味方が現れましたからね」

「……うむ」ヴァリス将軍は言葉少なく応じ、話題を変えた。「巨人族襲撃の際にネウトラ評議会の者が来ていたとか」

「ええ。彼は学術調査団の学者で、ケストル上空を航行中に我々エウメロスの救難信号をとらえ、駆けつけてくれたのです。退避を拒んでいた国王陛下を説得したのは彼ですよ」

「ふむ。おまえはその男と航空機で飛び立ったと聞いたぞ、どうやら武勇伝を聞かねばならんようだ――そういうことはな、すぐに報告してもらわんと困る！　一体、何年近衛隊をやっとるんだ！！　あとで部屋へ来たまえ！！」

　将軍は途中から口調を荒げ、足音も荒く行ってしまった。レルもまた背後数メートルのところにバイスロイの側近がいることを感じ取っていた。

78.

「なんと、おまえはケストルで王女殿下の居所をつかんできたというのか！」

「長年警護者として仕えて来た僕の直感です。ケストル王の手の届くところに、豪華な鳥かごに閉じこめられた鳥。ただの鳥ならば世話役の者が付き添っているとも思えません。その世話役の少女が『ヘルガさま』と口にしたのを僕は間近に聞きました。そしてその羽色は王女殿下の瞳と同じ瑠璃の青。間違いなかろう、と」

「ふむ――で、その世話役の娘ごは――」

　はい、とコタエが話を受ける。「その娘の一族は王の直轄地を任されておりました。直轄地付近で拉致されたのです。その現場と瞬間を目撃した者が幾人もおります。そう、ネウトラ評議会学術団の調査中の出来事だったのです。王としても到底見過ごすことはできません」

　コタエは病人けが人の手当てに走り回ってきたはずだが、いささかの疲れも見せていない。異国の地で一軍の将を前にしてもびくともしない。よく響く声でゆったりと話す。たおやかな細い体をまっすぐに伸ばし、毅然と相手の目を受け止めている。そして彼女は言った。

「彼女は一労働者として我が国の民全員の健康のために働いておりました。その者を、なんの断りもなく国土に侵入し、衆目のもとに拉致する。あるいは辺境の小国、娘ひとりと侮ったやも知れず。が。そのような非道を、王は決して許さないでありましょう」

「……」

「とはいうものの。故郷を遠く離れ、土地柄、人柄、風習、もののとらえ方、考え方。わからぬこと戸惑うことばかりでございます。どうか、将軍閣下、レル様、お力をお貸しくださいませぬか」
　コタエは深々と頭をさげ、短い黒髪が両側からおもてを覆った。

「おもてをあげられよ。コタエ殿。聞けば、その娘ごにわが王女殿下が世話になっているという。それぞれ事情は違えども、ひとところにとらわれているこの二名を、我々は取り戻さねばならぬ。国土を、民の多くを踏みにじられた我らにどのような手段が残されているか、実は、想像もつかぬのだ。我らの方こそ、コタエ殿の力を貸してもらうことになるかもしれないですぞ」

　バイスロイの前ではおとなしくしていた将軍だったが、コタエには雄弁だった。「直感だ」、と将軍はあとで息子に言った。「この者は信用できるか？　力の有無は？　わかるだろう。おまえにも」

79.

　ヒューダーの操縦する航空機は石畳の上に鳥のように舞い降りる。
　石畳といってもそこは地面ではない。建物の上だ。上に行くにしたがって少しずつ、階段状に狭くなっている四角錐の構造物の上、といった方がいいだろうか。一番下の部分は一辺が１キロメートル近くもある。高さはおよそ300メートル。面積にしてちょっとした町、高さにして山である。
四方に広いテラスが階段状に何段も張り出し、航空機はその一画に降りたのだった。

　機を降りるヒューダーとイリチヤをひなびた老人が出迎えた。体を折り曲げ、「お待ちいたしておりました」と、丁重なあいさつ。
「コモラ先生！」ヒューダーは目で笑い、嬉しそうに言った。「お元気そうで！」
「はは。お互いに、ですな！　しかし、相変わらずよい男っぷりで！　うらやましい！」
「取柄はそれだけです。頭では先生にかないません」
　ふたりは軽口を叩き合って声をたてて笑った。こんなヒューダーは初めてみる、とイリチヤは思う。
　コモラ老人に「そちらは？」と促され、「イリチヤ、といいます」ヒューダーは答え、イリチヤに向かって、「こちらはコモラさんといって、オレの先生だ。現在は総督の顧問をされている」

＊＊＊

　コモラはふたりを建物の内部へといざなう。石が音を吸収してしまうのか、人の声

も、靴音も聞こえない。

　窓は少ないが天井は高く、内側に白銀の金属が貼られていて、明るく、ひんやりとしている。外光が入るところにはシュロが生い茂り、石と金属の無機質感を和らげていた。

　そのシュロの茂りの向こうに、何やら動物が寝そべっている。深い黄色の地に黒の斑紋、丸い頭の上で聞き耳を立てるように耳を左右に向けている。ジャガーだ。肉厚の前足に顎を乗せ、長いしっぽの先がぱたりぱたりと床を打っている。コモラはそれを見て脇によけ、ヒューダーをちらりと見た。
　ヒューダーは立ち止まらずにジャガーの傍らまで歩いていく。すると、ジャガーはおもむろに体を起こし、しなやかな動きで立ち上がった。頭の位置はヒューダーの腰よりも高い。そして、ゆったりと向きを変え、ヒューダーの進行方向へと歩き出す。
　イリチヤは顔をしかめてコモラにささやいた。（あれはなに？　噛みついたりしない？）
（だいじょうぶ）コモラは平気な顔でささやき返す。（ですが、バランケの顎は強力でね、大ヘビを仕留める時は相手の頭をひと噛みで噛み砕きます）
　バランケというのがジャガーの名前だった。

　その部屋の壁はやはり白っぽい金属貼りだったが、一面を見事なタペストリーが……深紅の毛織物に金糸が抽象模様を描いている……覆っていた。
　大理石のテーブルに置かれたいくつもの香炉は部屋の主の趣味らしい。形も大きさも素材も異なるが、それぞれ手の込んだ作りがされ、広い部屋を仕切る薄布には極彩の糸で鮮やかな刺繍が施されていた。若干、調和に欠けるようにも見えるその品々が、芸術と学問の都市、メッサナの学生の手によるものだとわかれば、感嘆は別の意味にかわるだろう。どれも、超一流の価値のあるものばかりなのだから。

　それらの調度品のなかにゆったりとおさまっているのはメッサナの総督。印象的な強

いまなざし、彫りの深いくっきりした目鼻立ち、金色の肌をし、黄金の髪をきっちりと結いあげた女丈夫である。

「バランケ。お客様を案内してくれたのね。ありがとう」
ジャガーはごろごろと喉をならし、主の傍らに行儀よく座り、首を撫でてもらった。

「パンテオラ総督閣下」
「おお。ヒューダー！」

　メッサナ総督パンテオラは立ち上がってヒューダーの礼を受ける。彼女は長身のヒューダーと同じくらいの背丈があった。きゃしゃな女性しか見たことのないイリチヤの目には迫力満点に映った。

「何年振りかしらねえ。そう、あれは……このバランケがまだいたずら盛りの子猫だったから……」
「三、四年ほど前です」
「あなたはまだ十代だったわ、まあ、すっかり大人っぽくなって。見違えるようだわ」
「パンテオラさまにはお変わりなく」
「あたくしくらいの年齢になればね、変わりようがないのよ」パンテオラはほがらかに笑った。「さ、そちらのお連れを紹介してくださらない？」
「は。イリチヤといいます。訳あって同行させています」
「イリチヤ……槍ね」おだやかな目顔で彼女はイリチヤに笑いかける。「あなたたちとお話したいことはたくさんあるわ、でも、本題に入りましょう。事はさし迫っているようなので」

80.

　パンテオラはふっと表情を変えた。迎賓用ではない。真顔に。

「先だって、メッサナはエウメロス王国からの救難要請に救助隊を派遣しました。続いて、ネウトラ評議会本部から、黄金門市から、次々と救難信号が発せられました。救難要請は口を揃えてこう言いました。『巨人族に襲われた！』、と。伝説の巨人族ならわたくしも知っています。ネウトラ評議会がその実態調査をしていたことも。けれども、集団を組んで大都市を襲い、破壊し、農地に踏み込み、住人といわず家畜といわず――蹂躙しようとは――！　とても、信じられません！　一体、本当に起きていることなのですか！？」

「本当かどうかと問われれば、本当です。総督閣下。オレは彼らのエウメロス襲撃をこの目で見たのです。オレ自身、信じられなかった。彼らはオレの知っている巨人族ではなかった。彼らはたしかに好戦的で肉食を好む傾向があるが、オレが見た彼らはまさに飢えたケモノだった。彼らの理性は食欲を満たすためだけに使われているようだった」

　パンテオラはぐっと顎を引いて強いまなざしをヒューダーに当てた。
「こうは考えられませぬか。彼らは、そう作られたのだと」
「――作られた――」
「そうです。方向性が感じられませんか。誰かが、何かを企んでいる。巨人族はそのために作られたのではないだろうか」
「しかし――どうやって――」

　ジャガーのバレンケがつと立ち上がり、ヒューダーに近寄り、鼻先を押し当てるようにして彼の上着の裾を噛んだ。噛んで引っ張る。

「その話を聞かされた時、私も思いました。どうやったらそんなことができるのか」

「総督、誰からそんなことを聞いたというのです！？」
「上級賢者。ダーヴェ」
「――ダーヴェ！？」
「先だってここへ見えたのです、エウメロスからの救難要請の前です。そしてこう言われました。『間もなく巨人族の大侵攻が始まる。彼らは我々の知らない方法で作られ、操られている』。『ほどなく、ヒューダーがここへ来るでしょう。そうしたら、私、ダーヴェは謎を追って先に行ったと、伝えてください』。」
「ダーヴェは謎を追って先へ――」
「ええ、詳しいことは私にはわかりませんが、それがあなたへの伝言です。彼は十日余り前に旅立ちました」
「どこへ」
「ほら、バランケが行こうと言っています。バランケの双子の兄、バラムがダーヴェと同行しています。バランケには彼らの行く先がわかります」

81.

「おまえはここに残れ」ヒューダーはそっけなくイリチヤに言い渡した。
「どうして！？　ぼくもついてくよ、連れてってよ！！」
　バランケは床に寝そべったまま、ぎろりぎろりと目だけ動かして二人の言い合いを眺めている。

「巨人族側が何を企んでいるのかわからんのだ。ここも無事では済まないかもしれん」
「え――こんな頑丈な砦を襲うやつなんているの？？」
「あのなあ、ここは砦じゃない。総督府だ。この辺一帯を治めるための役所だ」
「役所～？」
「まあこどもにはおもしろいところじゃないのはわかる。あとでコモラ先生に外へ連れ

て行ってもらえ。見どころはやまほどあるぞ。ここは知と美の殿堂だからな」
「えーと、そのでんどうを襲うやつはいないの？？」
「知の都を力で襲おうなんて、恥を知る者ならできんだろ」
「ふーん、恥を知らなかったら？　襲うってこと？？」
「そうだ。それが恐ろしい。我々とは価値の体系がまるで違うということだから」
　ヒューダーは上着の内側に様々な武器やら装備やらを忍ばせている。さすがに素手で謎を追いかけるわけにいかないだろうというので、コモラが奔走して工房に急きょ、作らせたものだ。メッサナで学ぶ者は学生といえども、石と金属の加工にかけては世界一である。
「だから――そんなことになったら――そんな想定はしていないからここには砦もなければ兵士もいない。アンベレオ本国に援助を頼むのもはばかられる」
「なんで？」
　無邪気な問いかけにヒューダーはちらりと目をあげてイリチヤを見た。
「巨人族と繋がっているかもしれんからだ」
「……」
「だから、なにかあったら、ここはおまえが守るのだ」
「そんな――ぼくになにができるっての？」
「自分で考えるんだな」
「そんなあぁ～ねぇ～ヒューダァ～ねぇってばぁ」
「ええい、うるさい、まとわりつくな、あっちへ行ってろ！！」
　ぶっとふくれるイリチヤである。
「そうだそうだ、ここに暇をもてあましてるやつがいた。おい、バランケ――」

　ヒューダーに邪険にされてすっかり機嫌をそこねたものの、ジャガーに不機嫌そうな横目で見られて、イリチヤはさっさと部屋を逃げ出した。

82.

メッサナ市の中央を南北に貫くおよそ40メートル幅の、広場のような大通り。きっちりと石が敷き詰められているが、周囲に無数に立ち並ぶ石製の建物同様、表面には熱を吸収する処理が施されていて、強烈な陽射しの下だというのに照り返しで熱くてたまらないということがない。

大通りから正確な角度で東西に枝道が伸びていき、高いところから眺めれば計画的に作られた都市だということがよくわかる。道路の下には上下水道が張り巡らされ、いたるところで泉のように地表に湧き出し、あるいは川になって流れ、都市に緑を茂らせていた。ほとんど真東にある黄金門市を造った人々の作であるだけに、その技術力の高さ、堅牢さ、美しさは黄金門市に勝るとも劣らない。それゆえ、メッサナ市中枢は、名を変え姿を変えて後世まで残ったのだが、黄金門市は海中に沈んでしまった。

傾斜する壁と垂直の土台を交互に積み上げた建造物を階段状ピラミッドというが、見渡したところ、この形状の建造物は総督府だけだ。たいていは石の厚い壁に四方を囲まれ、広い中庭を備えた建物群である。中にはてっぺんにドームを乗せたものもあった。
「あのドームは天文台だよ」とコモラはいう。「あれが月の天文台、あっちが金星の天文台。そしてそこにあるのが太陽の天文台。どれも神殿をも兼ねている」
「農業の大学、土木研究の大学、手工業の大学、金属加工の大学、機械を研究し、造る大学、建築の大学、音楽士の大学、舞踏士の大学、ありとあらゆる研究機関が一堂に揃っているのだ。単身の若い学生たちは共同住宅に住んでるし、家族のいる学者などは中庭つきの一戸建てだな。中庭では花や野菜を育てたりオブジェを飾ったりジャガーを放し飼いにしたり、している。なにをしても自由なのだ。学問の充実は個人の生活の充実に比例するからね」

家々を囲んでいる石の壁はそれぞれ趣きがちがう。多くは様々な色合いの青い色で塗

られていた。植物からとれる染料と鉱物由来の顔料とを混ぜたもので、混ぜる割合で色味が変わるが基本的に鮮やかな青で、メッサナ-ブルーというのだそうだ。これを石材に塗ると耐久性が格段にあがるのだった。

　およそ子ども向けではなかったが、コモラはそういったことを熱心に、かつ、嬉しそうに語った。
「私はこの町が大好きなんだ。だって、美しいじゃないか！　街並みのこの青い色にしたってわけがある。それぞれの神殿は定期的にお祭りがあるんだが、月は夜に、金星は明け方か宵に、太陽は昼間、行われる。この太陽の祝祭がまた見ものでね、捧げものは花と果物なんだ。大勢の人たちが着飾って花と果物を抱えて神殿に集まる。衣装と花々と果物の極彩が町のブルーでより際立つ！　そりゃあ見事にね！　その光景を目にするたび、生きていてよかったと思うのだよ！」

83.

　居住区の数ブロックごとに食材や出来合いの飲食物を提供している建物がある。マーケットだ。コモラはそこでよく冷えたマンゴーのジュースを求めてイリチヤに手渡し、自分は温かいチョコレートの香りを楽しんでいる。ふたりは風通しのいいシュロの木陰のベンチに腰かけ、ひと休みする。

「いろんな人がいるだろ？　髪の色、目の色、肌の色。若いのも年取ったのもいる。ここメッサナは、学びたいという志さえあれば誰だって学べるのだ。だから世界中から人が集まって、学び、やがて旅立っていく。旅立った者たちはその先々で、メッサナで学んだことを皆と分かち合うのだ。それもこれも、学びたいという志、己の内からの情熱の噴出ゆえだ。そうして生きることが人間にとっても最も幸せなことなのだと信じる。

それが『メッサナの存在理由』だからだ」

　コモラは相変わらずひとりで喋りまくっている。相手はかつての教え子がはるばる遠くから連れて来た子どもだという一種のうれしさもあって、元から備えている『教えたい要求』が逆ってしまったのである。イリチヤの方は、コモラの話はほとんど理解不能で辟易していた。それでも、ヒューダーいうところの『知と美の殿堂』都市の壮大な規模からなる解放感は半端ではなく、空気はほどよく熱く、冷たいマンゴージュースは思いのほか美味で、まあ、なかば朦朧 としながら聞き流していた。

　彼らは食材、日用雑貨があふれるマーケットをぶらつき、コモラは好物の香辛料やらカカオ豆やらを買い求めた。イリチヤはなにか欲しいものはないかと聞かれ、笑って首をふる。珍しいものはいくらでもあって目移りするが、どう使うものなのか、食べられるものなのかさえわからないのだった。それでも、ふと目に留まったものがあった。黒曜石の破片だ。大きな木製のトレーに山盛りになっている。
「工芸品に細工したときに出る削りカスだよ。使い道はいろいろあるから、こうやってひと山いくらで売っているんだ」
　イリチヤはむしょうに懐かしい思いで、少しでいいから欲しいというと、売り子の少女が目のつんだ布の小袋に詰めてくれた。

　やがてメッサナの町に夕暮れが訪れるころ。マーケットのさんざめきがふと静かになった。みな、手を止め、思い思いの姿勢でなにやら、耳を傾けているようだ。

「――メルノが歌ってる――」
「コモラさんの知り合いなの？」
「いや、彼女は音楽学校の生徒だよ。どれ、行ってみよう、彼女の歌を聞きに行こう」

84.

友よ

友よ
ふたり丘を駈け

可憐なひなぎくを摘んだ日のことを覚えていますか

ふたり小川で水をかけ合った日のことを覚えていますか

あれは遠い昔の日々

もはや丘はなく
小川もなく
可憐なひなぎくは流された

荒海と時とがふたりを隔ててしまった

友よ

さまよう日々も失意の日々も

君を忘れたことはない

夕暮れのひなぎくを忘れたことはない

時は去り　時は来る

幸い君にあれ

友よ――

85.

　メルノが歌い終わり、聴衆は静かに拍手を送り、散っていく。誰もいなくなった広場でイリチヤは膝を抱えている。

　メッサナの夕暮れ。

「あの歌を聞くと、私も何日か、何も手がつけられなくなるよ」つきあって広場の石畳

に座ったコモラが慰めている。彼はイリチヤが泣いているのを、ふしぎに思わなかった。それどころか、「きみの気持ちはよくわかる」、と言うのだ。

「昔、この偉大な町が水に浸かってしまったことがある。天変地異が起こり、決して低い場所ではないメッサナが洪水に襲われたのだ。想像もつかないことだが、本当にあったことなんだよ。多くの町が壊れ、農場は泥に埋まり、家族も、友人同士も離れ離れになった。あの歌はそのことを歌っているんだ。あの記憶を先祖から引き継いでいる者は魂を揺さぶられる思いがするんだ。初めて聴いた者はたいてい、打ちひしがれ……泣いてしまうんだよ……」

　イリチヤにとって、水は親しいものだ。火に次いで親しいものだ。しかし水によって離れ離れになる家族も友人も、彼にはいなかった。故郷の町も農場も帰る家も彼は持っていなかった。

　彼を揺さぶったのは己の罪深さだ。この地が水によって分断されるよりもずっと前に、火をつけて世界を燃やしたのは、彼だ。

86.

　誰かに体を揺すられてイリチヤはがばと飛び起きた。総督府のあてがわれた部屋に戻るなり、眠ってしまったらしい。揺すっていたのはコモラだった。
「いちど、起こしたんだけどね」すまなそうにコモラはいう。「『疲れてるんだろう、

寝かしておいてやってくれ』と、ヒューダーさまのおっしゃるままに、無理に起こさなかったのだ」
「いっしょに食事するつもりだったんだ！　ヒューダーはどこ！？」
「もう真夜中だ。ヒューダーさまは出かけられるところだよ」

　総督府の秘密の出入口を使ってコモラはイリチヤを外に連れ出した。コモラは森の中を一心に歩いていく。真夜中で真っ暗なはずだが、シュロの茂る森だということがわかる。星影にシュロのシルエットが浮かんでいるからだ。
　空を見上げてイリチヤはささやく。（こんな星空、見たことないよ）
　コモラもささやき返す。（素晴らしいだろう？　今夜は新月で月が出てないからね）

　上にばかり気を取られているイリチヤは気がつかないが、彼らの足元には深夜だというのに彼らの影ができている。星明りだけで影ができる。満天の星。夕食をとりそこなったこともヒューダーに置いてけぼりにされそうなことも、なんだかどうでもいいや、とイリチヤは思う。星は日常の層とは異なる高みを巡っている。その光りに照らされていると、空腹の自分もヒューダーに邪険にされた自分も愛おしいような気がする。いや……もっと前の……泥沼を這った自分をさえ。思い起こしたくもない厭わしいはずのその光景が、なにか特別の意味を持っていたような気がするのだ。星明りが……高みからの光が何かをもたらそうとしていた。それは、自分は誰か、という問いかけそのものだったかもしれない。
　ふと現実に引き戻される。シュロの森が途切れ、遮られていた空が地平線まで開けている。彼らの頭上から地平線まで、幅も密度も何重にも不規則に織られた光の帯が、のたうつヘビのような陰りとともに流れ落ちている。天の川だ。それを背景に、人影が立っている。上から下まで全身黒い装束のその人は――
「ヒューダー！」
　彼の傍らで黄色い目を光らせているのはジャガーのバランケだ。バランケは彼らの到着をうなり声で迎えた。「遅い!!」と文句を言ってるようだった。
「ヒューダー！　こんな夜中に出発するの！？」

　人影がうなずく。
「こんな夜中でなければ出発できない」
　ヒューダーはぐるりと頭を巡らし、夜空を、天の川を指さした。「目指すものは、この先にある」
「……」
「冥界の位置は天の川の位置と対応しているのだ」ヒューダーは低い声で言った。誰にも聞かせたくないように。
（冥界――）
「そんな顔をするな。オレの用心棒は行き先を心得ているし、兵士百人に匹敵する」
「やっぱり……ぼくを連れてってくれないんだね」口でいうほど、イリチヤはすねてもむくれてもいなかった。
　ヒューダーは、おや？　と思った。手のかかる子どもと思って近づくと大人のような落ち着いた顔をして見返してくる。
「おまえをここへ連れて来た訳は前にも言った。おまえの役目は地上にある」
　わかった、とイリチヤはうなずいた。
「なにか起こったら、なんとかしてみせる。ぼくはヒューダーにだって負けないもの」
　ふっとヒューダーは笑う。「おまえにこれを」
「……なに？」
「短剣だ。黒曜石でできてる。マミヤを助けに行くなら持っていけと、ゴンから渡された。おまえに預けておく」
「――きっと、帰ってきて」
「むろん。マミヤを助けにいかにゃならんからな」イリチヤの細い肩に手を置き、相手の目をのぞきこむ。「あとを頼む。ただし無茶はするな」
「それはこっちのセリフ」
　笑いの波動とともにヒューダーの手が離れる。次の瞬間には彼の姿は目の前から消えていた。はるかかなた天の川の落ちていく方向へ、ふたつの影がみるみる小さくなっていく。

87.

　エウメロス王国は美しい所だった。大きく深く内陸に切れ込んだ湾に島々が浮かび、外洋は遠い。土地は水豊かで、点在する湖が青く輝く。かなり北に位置するため冬は長いが訪れる春はあらゆる植物がいっせいに芽吹き、いっせいに花開き、鳥も蝶もいっせいに野を飛ぶ。夏は樹高の高い広葉樹が葉を茂らせ、やがて赤く色づき、大気まで赤く輝かせる。古い土地でもあり、いつの時代のものとも知れぬ遺跡が野に埋もれ、そこここに顔をのぞかせる。石のテラスは苔と草木に覆われ、石の柱や壁にはツタが這っている。
　花咲く野を、緑したたる遺跡の中を、赤く燃える森を、少女時代のヘルガは駆け回った。空気は澄んで、植物の生気に満ち、陽ざしは温かい。彼女はいつも護られ、愛されていると感じていた。満たされた幸福感のもとに、彼女はこの地、自然、人々を愛した。詩を読み、作り、人々と笑った。鳥のように心は空を駆けた。常に護衛がつく、王族の自覚のない少女の時代に。
　やがて偉大な父が病に伏し、父の代わりに王族の印を額につけねばならなくなった。父の仕事は父の弟が引き継いだがそれはあくまで臨時のもので、いずれは王の直系の長子である自分が前面に立たねばならない時がくると知った時、夢のような少女の時代は去ったのだと感じた。

　それでも彼女の護衛は言った。「いつなんどきでも、ヘルガさまに何が起こっても、僕がお護りします。どこまでもご一緒します」
　彼はその言葉通りに彼女を護ってくれた。大木によじ登って降りられなくなった時も、底なし沼にはまった時も、必ず駆けつけて勇気づけ、助けてくれた。彼の実直な性格と、時おりみせる屈託のない明るい笑みが、好きだった。彼の負う職務と責任抜きで、彼を信じられると思った。

　きっと助けに来てくれる。必ず来てくれる。彼女は自分に何が起こっても、そう信じ

てやまなかった。異国で理由もわからずとらわれている今でも、変わらず、信じていた。

　その日、部屋を訪れたケストルの老王は言った。「そなたの帰国が決まった」

　にわかに信じかねる言葉だった。待ち続けながら、心のどこかで封をしていた言葉。信じられない。どう気持ちを言い表していいやらわからないくらいだった。そして老王は無表情に続けた。「明日、くにから迎えがくる。そなたの婚約者がな」

88.

（なんといったの――）
（婚約者――？）

　身に覚えがない。なんのことなのか。老王は冗談を言っているようでもない。そそくさと部屋にやってきて、鳥かごから彼女を出し、呪を唱えて魔法を解き、無表情にそう告げたのだ。言いたくもないことを言わねばならない、そんな風にも見えた。

　ならば、本当に、老王の鑑賞に堪える時は終わったのだ。くにへ、帰れる――！

　けれど、この妙な感じは何？
　婚約者って、誰のこと？

老王は来た時と同じようにそそくさと出て行き、入れ替わりに着替えの品々が運び込まれてきた。思いがけない展開にマミヤは右往左往している。
「湯あみのお仕度をしなくちゃ！　お湯にはこの薬草を入れるのね！　ああいい匂い！
髪はこのシャンプーで洗って、湯上りにはこのオイルでお手入れ、と。えーとそれからそれから」

浴室と居室を行ったり来たりしているマミヤのことがふと気になる。私は帰国できそうだけれど、ケストル人ではないこの娘はどうなるのかしら。

ヘルガに選択の余地はなかった。ケストルにいればまた鳥にされてしまうかもしれない。この国を出る。それしかない。婚約者が何者なのかわからない、本国とケストルの間でどんな話になっているのかわからない。けれども、道はひとつしかない。とにかく、進もう。

マミヤ、とヘルガは娘に声をかけた。「行きましょう。私といっしょに」
そして、温かい湯に浸かりながら、祖先に加護を求めた。

89.

「いったいどうなってるのだ！」「話が違うではないか！！」「あの娘はうちのヘンリクと結婚するんじゃなかったのか！！」「親父どのには冷たい目でみられるし！！」

ケストルの第三王子ウルリクに責め立てられ、『導く者』はうんざりしていた。

（いったいどうなってるってね、それはこっちのセリフだよ）（黄金門の一族を取り逃がしたのはまずかった）（もっと抵抗してくれるはずだったのに。皇帝が都を見捨てて

さっさと逃げを打つなんて）（まあ、おかげで黄金門市はほとんど無傷で手に入った。これからどうとでも利用できるというものさ）（それにしても――）

「それにしてもバイスロイとは何者なんだ！！！」

「皇帝の息子のひとりだよ」

「――皇帝に娘が幾人もいるのは知ってるが――息子がいるとは――聞いたことがない」

「公表しなきゃならん法はないからね。ただ、親父さまはご存じだったようだ。その名を聞いてすぐに手のひら返した」

「すると――エウメロスは皇帝と手を結ぶつもりなのか」

「エウメロスは王様が死んじゃったし、王子はまだ子ども。どうしても王女様を取り戻したい。そこへ皇帝が一族もろとも転がり込んだ。これはちょっと計算外だった」

　計算外という言葉にオルリクはさすがにむっと気色ばんだ。彼にしてみれば、物事はどんどんおかしな方向へ転がり始めているわけだが、『導く者』は深刻な態度を装いつつ、内心はそうでもなかった。

（これは――先が読めん。いや。面白いことになるかもしれない！）

「なんとか、ならんのかね！」

「エウメロス人というのは扱いづらいのだよ、ヘルガさまを見ててもわかるだろ。芯が固くてなかなか揺るがない。だから、真っ先に、徹底的に、国土を叩いたわけだ。次

に、正義の味方の国際救助隊みたいなネウトラ評議会本部をね。ここを潰しておけば救助の手は激減する。そのネウトラ評議会が助けを求めるとしたら、黄金門市の皇帝だ。だからここも潰した。それもこれも、オルリクくん、きみが隣国エウメロスの豊かな土地を手に入れるため。そのへんは、わかってくれるよねえ」

次第に優しくなっていく『導く者』の声音に、ウルリクはさすがにぞくっとした。口を開けてみたが声が出てこない。ごくっと唾を呑み込み、心の中で叫ぶ。
（ネウトラ評議会と黄金門市の皇帝を敵にまわすなんて話はきいてない！！）

しかしようやく出てきた言葉は本心とは少々、違っていた。「わかっているとも。そなたが私のために骨を折ってくれていることはよくわかっている。感謝しているよ」

90.

エウメロスの使節団を招き入れるのに、離宮はなにかと都合がわるかった。そこにあるのは離宮だけではないから。隣国との国境付近に駐留の軍隊だの、軍用機の格納庫だのを置いているのを知られたくないわけである。使節団は王都へ招くのがよかろうということになって、山のふもとの離宮にいた高位の者たちはあたふたと内陸の王都へ移動した。いきなり、王さまが明日帰ってくるというのだから、主不在でのんびり、あるいは、好き放題していたお城は大慌てだ。城内での観劇も晩餐会も舞踏会も全部取りやめ。この日のための髪型と衣装のチェックに明け暮れていた貴婦人方からは不平不満の大ブーイング。王が帰ってくるというのにである。

オルリク第三王子には夫人がいるが、たいへん嫉妬深い人で、自分以外の后を断固認めなかったし、愛玩動物を飼うのさえダメというので、オルリクは最初からヘルガの扱いを父王に押し付けた。じつは、老王には、正后でない后待遇の夫人が十人いる。法律

で『十人以内』と決まっているから……自分の代で決めた……それはいいのだが、そこへ鳥かごに入れたうら若い美女を連れて行くのはさすがに色々とまずかった。そんなわけで、ヘルガは隣国からの正式な国賓としてケストルの王城に入ることができた。

はしたない不平不満が静かなさざ波のように漂っているおかしな雰囲気の中に、ヘルガ王女は迎え入れられた。貴族の特権を持つ男たちは美貌の王女に目の色を変え、様々な催しを当てにし楽しみにしていた女たちにしてみれば、隣国の王族だろうがなんだろうが、まったく招きたくない客だった。晩餐会も舞踏会も歓迎会に切り替えるくらいはできそうなものだが、ケストルの、ことに女たちにはそういった融通も発想もなかった。自意識が強く、優れたものに対する劣等意識が根底にある国民性のゆえだった。貴族の女の身の回りを世話する者も同族ではなく、たいてい他国から連れて来た奴隷だというのはそういう事情からだった。

だからケストル人たちの目には、己の奴隷であろう異国人の娘の手をしっかり握っているヘルガ王女の姿が嫌でも異様に映ったのである。

91.

黄金門の皇帝の息子、バイスロイがケストルに乗り込んだのは、ひとえに黄金門市を荒らしまわる巨人族を撤収させるためだ。しかし、皇帝一族に避難場所を提供しているエウメロス王国の王女がケストル国内で保護されていた。ケストルは保護という言葉を使っていたが人質も同然である。巨人族を使ってエウメロスの国土を破壊したケストルはいずれ、王女返還と同時にエウメロスの統治を狙ってくる。バイスロイはエウメロス王女の婚約者を自称して人質を取り戻そうとしたのだった。

婚約者云々にはエウメロス側は激しく抵抗した。王女本人の了解もなくそんな話に乗れるわけがない。バイスロイは逞しい顎を見せつけるようなしぐさをしてから、言っ

た。「これ以上有効な方法があればお示し願いたい」

　たしかに有効ではあったから、エウメロス側も言葉に詰まる。バイスロイは相手が態度を硬化させて皇帝一族の待遇に手を抜かれては困ると思い、「いやいや」と態度を和らげる。
「いや、これは方便である、諸君。ヘルガ王女は貴国の王位を継承する第一人者、そのような方の結婚には大きな意味があることは私のような不調法者にも察しはつくというもの。ケストルはそれ故に国内に留め置いているのだぞ。だから、すでに王女殿下が黄金門の一族と婚姻の予定があるとわかればケストルとて、今以上のことはできぬはず。いや――むしろ――そのような情報を知らずにケストル内で事を進めた者の見識が問われることになりはしないか――よろしいか、諸君、王女殿下の婚約は作戦のひとつと考えていただきたい。それによって我々は有利に事を運ぶ可能性が出てくるのだ！」

　抵抗勢力を説得するのに精力を傾けるうち、ヘルガの人となりがバイスロイの耳に入る。エウメロスの残党にとってヘルガ王女は希望の星なのだ。
　皇帝一族の人間であるバイスロイにはよりどりみどりの縁談があったが、この王女だけは縁がなかった。
（だが事情がかわった）
　エウメロス王家の息女なら血筋も申し分ない。黄金門市とエウメロスとが同盟関係を結ぶに当たってこれ以上の好都合はない。
　臣下からこれほど慕われる王家の女性を妻にできるかもしれない。そしていずれエウメロスは黄金門の手厚い保護を受けるだろう。それはエウメロスにとって悪い話ではないはずだ。ひょっとしたら次の次の皇帝はエウメロスの血を引いているかもしれん――

　自分で「方便だ」といっておきながらバイスロイの中では夢と妄想が膨らんでいった。

＊＊＊

噂ではとても美しいひとだと聞いていたが、ヘルガ王女と対面したとたん、バイスロイは雷に打たれたように感じた。これほど美しいとは！

雪花石膏のごとき白く滑らかな肌、波打つ白金の髪、けむる瑠璃色の瞳。咲きかけの野ばらのような唇。たしかに聞いたとおりだ。

が……

その女はまるで彫像のようだった。瞳に輝きはなく、表情は乏しい。紛い物の彫像だ。婚約者を名乗るバイスロイに対してただ、「お迎え、ご苦労に存じます」と平板な声で告げただけだった。そして彼女は侍女らしい黒髪の娘としっかり手を繋いでいた。こっちの侍女の方がまだ生気があった。バイスロイの視線を受けてたじろぐどころか見返してきたのであるが、高貴な男は奴隷には興味がなかった。

彼はヘルガに対する興味をもいっぺんで失い、そんな娘を希望の星とあがめているエウメロスの連中の正気を疑いだしていた。

92.

エウメロス-黄金門連合の使節団は二機の航空機でケストルに入った。皇帝一族の人間とエウメロス王家の人間を同一の機に乗せて、万が一事故が起こった場合を考えてのことである。一号機にはバイスロイと彼の参謀・パソネル、エウメロス国務省の高官・ロウナス、二号機にはエウメロス近衛隊長レル、副官のアンテロ、コタエとが搭乗、二

号機が王女を収容して帰国し、一号機は更なる交渉のために残る、という算段だった。

　手を繋いだ女性ふたりは国務省高官ロウナスから近衛隊アンテロへと引き継がれ、航空機に乗り込む。王女の着席が確認されるとロウナスは近衛隊長の腕をつかんだ。
「殿下は、故国を襲った惨劇を知らされ、たいへん衝撃を受けられたそうだ。御父上も亡くなられているからな。かなり参っておられるご様子。とにかく一刻も早くこの地を離れ、エウメロスへ戻られよ。あとは我々が――」とアンテロに目配せし、「なんとかする。さあ早く！！」

　アンテロとロウナスとはケストルとの交渉のために残り、二号機は直ちにケストルを飛び立つ。ケストルに残った二名は並んで二号機を見送った。任務のひとつは終えたが彼らの心に達成感はなかった。取り戻した王女は彼らの知っている存在ではなかった。おそらく……病人だったのだ。

　レルには一目でわかった。ヘルガの身に何か起こったのだと。ショックの大きさに茫然自失しているのだと言われればそうかもしれない。しかしもっと深刻な何かが起こったのだ。それはコタエにもわかっていた。着席したヘルガの傍らで空いている方の手をとって一心に心を凝らしている。やがてコタエは顔をあげ、侍女をみて言った。「あなたがマミヤですね」、と。
「――あたしの名を知ってるの！？」
「私はコタエ。あなたの故郷からあなたを助けに来た者です」
「あたしの故郷から？」
「はい。信用していただければ幸い。ところで、マミヤ、ヘルガさまに何があったのですか？」
　半信半疑の色を浮かべていたマミヤの目が夢からさめたように見開かれた。

「ああ！　今朝、出立の準備が整ったところへ王様がやってきたの、年寄りの王様よ。『最後の別れだ』とか言ってたわ。なにかぶつぶつ言いながらヘルガさまの顔の前にこう、手のひらを差しつけて――まあ、あたしには目もくれないですぐに部屋を出てっちゃった。気がついたらヘルガさまの手があたしの手を握ってて、その時にはもう、こんな感じだったのよ！」

「なるほど――」コタエはマミヤの話を聞きながらヘルガの手を取り、また目を閉じていた。

　なにがなるほどなんだ！？　レルはじりじりと心の中で叫んだ。

93.

「新たな魔法をかけられましたね。『おまえがケストルで見たこと聞いたこと経験したこと、断じて口外してはならぬ』『口外した暁には、おまえの心臓は止まる』。つまり、口を封じられたのですよ」
「なんてことだ――」
「でも、マミヤ、あなたはずっとヘルガさまのそばにいて、ヘルガさまと同じものを見聞きしていたのでしょう？」
　コタエはいぶかしげに尋ねる。なぜマミヤの口は封じられなかったのかと。マミヤはちょっと笑って肩をすくめた。
「あのね、ケストルの人たちにとって、奴隷は人じゃないの。見たり聞いたり話したり、できないと思ってるのよ」
「……」
「昨日の夜、急にくにへ帰れるってわかって、ヘルガさまは真っ先にあたしのことを心配してくださったわ。『私はともかく、マミヤはどうなるんでしょう』って。それで、

ずっと、『決して私のそばを離れないで』『私と一緒に行くのですよ』って言っておられた」
　そういってマミヤは繋がれている手を見つめた。　レルはぎゅっと目を閉じる。
「僕が知っているヘルガさまはそういうお方だよ」
「あなたは……もしかして、近衛隊長さん？」
「そう。近衛隊長。レル・ヴァリスだ」
「ヘルガさまがよく話してくださった。『私の近衛隊長が必ず助けに来てくれます』『昔から、いつもそうだったのです』『だから私は決して諦めません』そう、とてもおだやかな目で」そこまで言ってからマミヤは、あっと声をあげた。「あの〜、もしかして、近衛隊長さん、あなたがヘルガさまの婚約者なの？？」
「え」
「あらまあ」
「ち、違います！！　コ、コタエさんまで！！　か、からかわないでください！！！」

（真っ赤になってますよ）（まんざらでもなさそうですね）

94.

「ヘルガさまの本国で何が起こったか、知っていますか？」

　コタエに問われてマミヤは首を振る。そうだ、マミヤもヘルガも何も知らされていなかった。巨人の群れがひとつの国を破壊し尽くしたなど、にわかに信じられない話だった。ヘルガに接するうち、彼女の背後にはおそろしく洗練された社会があることに薄々気がついてはいたけれども、それが暴力的な力によって瞬く間に瓦礫と化した、そんな話は想像すらできず、マミヤはただ首を振り、こわばった体をがたがたと震わせた。

「巨人族の侵攻とヘルガさまのケストル訪問は同じタイミングで起こったのです。王位継承権を持つ者は合法的に王位に就くことができます。ケストルはエウメロスの国土を蹂躙し、合法的に他国の国土も民も、手に入れるつもりだったのでしょう」

（改めて聞くとほんとうにイヤらしいな）赤面していたレルは冷や水をかけられた気分だった。

「襲われたエウメロスの民の多くは安全な場所へ避難しましたが、そこへ『黄金門市の主』、つまり世界中の王国を束ねる王、皇帝の一族がやはり故郷を蹂躙されて逃れてきたのです。似た境遇のエウメロスと黄金門市は、巨人族の黒幕たるケストル王国相手に共闘することに。そこで大きな問題となったのが囚われているヘルガ王女の存在でした――」

「あ、それで、エウメロスか黄金なんとかの誰かが、ヘルガ様を返してくれ、婚約者だから。明日迎えに行く、って」

「――そういうことです。かんたんにまとめてくれましたね」
　コタエは慎重に言葉を選んで説明していたつもりだったが、あっさりまとめられてしまって、少々脱力するやら、相手の理解力に感心するやらである。

「そういうことなんだ。殿下は驚かれただろうが、殿下の婚姻に関わる話をご本人の知らないところでこっそり決めるなど、断じてあり得ない。少なくとも我が国では。この度の婚約者云々は、あくまでケストルとの交渉のための方便、その役を買って出てくれたのが黄金門のバイスロイという人だ。彼がその旨ケストルに通告すると、ケストルは驚くほどあっさりと王女返還を承諾した。バイスロイが皇帝一族だというのが効いたんだろう。エウメロスの者では、こうはいかなかった。しかし――ようやくこうしてお戻

りくださったのに――殿下――」

「ケストルはそうしなければならないほど、多くの、重要な事柄をヘルガさまに知られてしまったということでしょうね」
「コタエさん……」
「あたしが！　知ってることは何でも話すわ！」
「マミヤ……ありがとう」
「探ってみたところ、なにかとても、異質な魔法です。強い執念を感じます……邪悪な執念がヘルガさまの自我を覆ってしまっている……でもやってみましょう。私に解けない魔法などありません――」

「隊長」操縦席のパイロットが呼びかけてきた。「まもなく国境を越えます――が――後方から軍用機が接近中」
「軍用機！？」
「ケストルの戦闘機です！　当機の上方に占位しようとしているようです！　――爆撃するつもりか！？」

95.

　この時代の空中戦は機関銃で撃ち合ったりしない。上から爆弾を落とすのである。激しく炸裂するようにできている爆弾で、直撃しなくても近くで爆発しただけで相当の被害をこうむる。容易に空中分解、よくて墜落に至るだろう。

　怒りのあまり、レルは自分の人相が変わるのがわかった。ケストルは王女の口を魔法で封じただけでなく、そもそも生かして返す気はないのだ。国土を踏みにじったあげ

く、国民の希望の星まで奪おうというのか！！　怒りのあまり、レルはケストル王を呪おうとした。その時。

「レルさまっ！！」
　激しい声はコタエだった。レルは思わずも、びくっとした。
「ケストル王に意識を向けてはいけません！　ケストル王は通路です！　王を通じて力がやってきます！」
「――どういうことですか！？」
「王の背後に何かがいます。しかしその者はヘルガさまに手出しができず、王を使って至近距離から術をかけた。不意打ちをしたのです。今、王に意識を向けるとレルさままで巻き込まれます！！」
「――あなたは大丈夫なんですか」
　コタエは汗にまみれていたが、ふっと笑った。壮絶な笑顔だった。
「ひとりでないのはケストル王だけではありません。私にはたくさんの父祖が『憑いて』います」
「……」
「レルさまはヘルガさまのことだけお考えください。ほかのことは考えないで！！」
「あのーコタエさん、あたしはなにをすれば？」
「マミヤ、あなたはイリチヤを呼ぶのです！！」
「……だれ？　それ？」
「そうだその手があった！！」
「だからだれ？」

　コタエとレルは同時に叫んだ。「早く！！　イリチヤを！！」

第五章『メッサナ』

第六章へ続く

第五章のあとがき

第五章、半分以上はケストルとエウメロスの話の割に、サブタイトルは『メッサナ』。
ここからたぶん（？）第二部になります。
表紙の雰囲気をちょっと変えてみました。ずーっと暗いトーンだったので。

ここで登場するメッサナ市はメキシコのテオティワカンをモデルにしています。前にメッサナを描写したときは大西洋の東、西インド諸島のどこかの島を想定してました。ところが調べてみたら″当時″、西インド諸島どころかメキシコ湾も大西洋もなかったのだった……

テオティワカン、オルメカの巨石や宝石の加工技術、ボリビアのティワナクはほんとは誰が造ったのか。

割と最近出版されたマヤ関係の本を何冊か読んでみましたがこういった現場を実際に発掘調査されてる方々は『誰が造ったのか』という話題に敏感だなーと感じます。ほんとにそう感じます。たしかにマヤはそれほど昔のものではないかも、だけどまあ、超のつく古代文明、非科学的な話題は学者の方々の世界ではご法度な雰囲気。

なんですが、レムリア期やアトランティス期に関する本や地図から入って、アトランティス第二亜人種・トラヴァトリ人、第三亜人種・トルテク人、第四亜人種・トゥラン人あたりの描写の段でメキシコやペルーが出てくると、やっぱり、衝撃、です。南北アメリカのこのあたりはアトランティス大陸の西海岸だったんですから。そこはアトランティス文明が黄金時代を迎えた場所で、いくつもの文明が興亡盛衰を繰り返した。テオティワカンやティワナクの背後にそういう歴史がある。らしいです。

『トルテク人は全アトランティス大陸人の中でももっとも立派、かつ堂々としたタイプで、物質的権力と栄光とをもって全アトランティスを支配した。彼らは群を抜いて秀で、活力に溢れていたため、後世、他の亜人種と混血してもその子孫は基本的にずっとトルテク人的であった。事実、数十万年を経た後でさえ、彼らはメキシコとペルーにおいて絢爛たる支配を続けた。彼らの退化した子孫が、北方からきた獰猛なアズテク人によって征服されたのは遥か後世のことである。』

マヤの諸族の伝説と歴史を記した文書、『ポポル・ヴフ』、『カクチケル年代記』などには、人類の祖先が住んでいた原初の都市として『トゥラン』、あるいは『トゥーラ』という地名が出てきます。

『トゥラン人という種族は非常に好戦的だが、隣り合ったトルテク人には連戦連敗で、大陸を支配するということはなかった。常に移動して遠方に植民する傾向があったので、大きな建造物を残すこともなかった。のちに彼らは祭壇で血にまみれた儀式を行った。これはほかの種族にはけっして見られない特徴。彼らの一氏族にアズトラン人……Aztlan・「アステカ」という名称は民族の伝説上の故地であるアストランに由来……がいる。トルテク人が起こした最後の大帝国を彼らが後に征服する』

そんなわけで……当時の建造物は何のためのものなのか。実は、これには資料があまりなくて……
『神から与えられる叡智と芸術の育成のための建造物はますます巨大になり、芸術性もゆたかになった。それらは神殿であると同時に教育と研究の場であった。認められた者はこの施設の中で学問の奥義を授けられ、宇宙の法則とその応用の仕方を学んだ。レムリア人はこの場所でそれらを科学と技法にまで高めた。（アカシャー年代記）』、というレムリア時代に関する記述ならありまして、うちのメッサナ市はそのへんの記述がモデルになっています。
現在の世界地図を見ると大陸はだいたい北半球に偏ってますが、レムリア時代は南半球に偏っていました。なので、それらの建造物を見ることはかないません。また、後世のアトランティス時代のものとも性格が違っているかもしれません。

　さて、＃84でメッサナのメルノが歌っているのは、オールド・ラング・サイン・Auld Lang　Syne。『蛍の光』。この歌はまたの名を『レムリア最期の日』というのだそうです。

2022年2月15日　記

奥付

Salamander in the circle
　第五章　メッサナ

2022年2月20日 初版発行
著者　　峯村　明　E-mail
表紙素材　「月とサカナ」http://snao.sakura.ne.jp/
制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社